【53】

氏　名（本籍）	澤田匡人（栃木県）（さわだ まさと）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博甲第3036号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	児童・生徒における妬み感情とその対処方略
主　査	筑波大学教授　教育学博士　新井邦二郎
副　査	筑波大学助教授　教育学博士　桜井茂男
副　査	筑波大学助教授　加藤元繁
副　査	筑波大学助教授　博士（教育学）　茂呂雄二

論文の内容の要旨

（1）論文の目的

近年，妬み感情が子どものさまざまな問題感情の背景に作用していることが指摘されている。そのため，子どもの妬み感情が，どのような要因によって喚起され，どのような行動に結びつくのかを明らかにすることは，子どもの問題行動のメカニズムを解明する上で意義がある。しかし，本邦において，妬み感情を実証的に扱った研究は皆無である。そこで本論文では，児童・生徒の妬み感情とその対処方略を取り上げ，特性・状況要因によって妬み感情が喚起され対処方略の選択に至る一連の流れを検証することを主たる目的とした。

（2）論文の概要

本論文は3部構成で，全10章から構成されている。

第1部の理論的検証は，第1，2，3，4章から構成されている。第1章では，本論文における妬み感情の位置づけを明確にした。妬み感情を“他者が自分より有利な状況にあることを知ることによって生じる不快感情”と定義し（第1節），妬み感情と類縁感情との共通点と相違点を明らかにした（第2節）。また，妬み感情の構造を整理し，妬み感情を，他者と自己の両方向に焦点化された複合感情であると位置づけた（第3節）。第4節では，妬み感情の発達に関する議論について検討し，妬み感情は1歳半から5歳の間に発生すると捉えた。第2章では，妬み感情を喚起させる要因にどのようなものがあるかを従来の研究に基づき導出した。社会的比較理論に基づいた喚起要因としては，自分より優れた他者が自分と似ているか（“類似性”）と，相手の優れた遂行領域が，自分にとって重要かどうか（“領域重要度”）を挙げた（第1節）。また，帰属理論から妬み感情の喚起には“領域”が関わっている可能性があること（第2節），さらに，望ましい対象を得られるかどうかという見込みの認知（“獲得可能性”）の存在が，妬み感情の特徴であると論じた（第3節）。第3章では，妬み感情をストレスとして位置づけ（第1節），従来の対人ストレスモデルなどを参考に，妬み感情の対処の種類と，その選択要因に関する予測を示した。第4章では，以上の理論的検討により，子どもの妬み感情がどのような方略が用いられているのかを明らかにすることを本論文の目的とすることを示した。

第5章では，子どもたちが実際に感じている妬み感情の実像を把握するために，小学2年から中学3年までの児童・生徒を対象とした半構造化面接を実施した。面接の結果，妬み感情が喚起される領域については8種類，対

処方略については16種類のカテゴリーに整理された。また，各カテゴリーに対する言及人数に偏りがみられ，成績領域で妬みを感じると報告した者は，小学生よりも中学生に多く，逆に運動領域で妬みを抱いたり，助言希求や自助努力のような建設的な方略を用いるのは，小学生に多かった。

第６章では，妬み感情の構造と，その喚起要因に関する検討がなされた。第２節では，第５章と同様に半構造化面接を小学校２年から中学３年までの児童・生徒に実施し，想起された事例に対する感情語のラベリングという観点から，妬み感情の構造を検討した。数量化３類による解析の結果，妬み感情には，他者に向かうネガティブな感情群と，自己に向かうネガティブな感情群，そして，その両方向性を有した感情の３つの側面があることが示された。第３節では，第５章の結果に基づいて作成された８領域からなる仮想場面を呈示し，小学３年から中学３年の児童・生徒に対して，12項目から感情語尺度への評定を求めた。まず，双対尺度法によって，妬み感情が喚起される３つの領域群（能力関連，処遇関連，特性関連）が見出され，それぞれの領域の特質に応じた種類の妬み感情が喚起されることが示唆された。次に，探索的・確認的因子分析を用いて検討したところ，妬み感情は領域・学年を越えて３因子（敵対感情，情動的苦痛，切望，欠乏感）から構成されることが明らかとなった。また，これらの因子は，領域ごとにそれぞれ異なる学年差・性差を有することも確認された。第４節では，状況要因として類似性と獲得可能性を取り上げ，各要因が妬み感情の喚起に及ぼす影響を分散分析にて検討した。その結果，獲得可能性が高いと，妬み感情が喚起されやすく，類似性の影響は能力関連領域における中学生になって現れることが明らかになった。

第７章では，妬み対処方略の構造と，その選択に関して検討された。第２節では，第５章の結果に基づいた対処方略16項目について，教師評定を用いた非類似度評定に基づく多次元尺度構成法の結果，“建設的－破壊的”，“認知的－行動的”という２次元が抽出された。第３節では，児童・生徒における仮想場面における妬み対処方略が検討され，探索的因子分析の結果，対処方略が３因子構造（破壊的関与，意図的回避，建設的解決）であることが示された。因子分析の結果に基づいて下位尺度を構成し，分散分析によって学年差・性差を検討したところ，意図的回避方略が，加齢に伴い選択されやすくなるのに対し，建設的解決は採用されにくくなることが明らかになった。第４節では，自分よりも優れた他者に対する感情，認知，行動を含む個人差である妬み態度尺度が作成された。妬み態度尺度は，他者疾視傾向は，自己蔑視の２下位尺度から構成され，第５節において，これらと社会的望ましさという特性要因が，対処方略選択に及ぼす影響を検討した。小学３年から小学６年までの児童を対象に，重回帰分析を行ったところ，他者疾視傾向は，小学３・４年では破壊的関与方略のみの選択に関わっていたが，小学５・６年になると，意図的回避方略の選択にも影響を及ぼすようになることが示された。また，自己蔑視傾向は，一貫して建設的解決方略の採用に寄与していた。

第８章では，第６章と第７章で得られた知見を統合する形で，特性・状況要因が，妬み感情の喚起とその対処方略の選択に及ぼす影響を検討した。まず，第２節において，新たな特性要因として，妬み感情の抱きやすさの個人差の測定に特化した，単因子構造の妬み傾向尺度を作成した。第３節では，この妬み傾向を特性要因，獲得可能性と領域重要度を状況要因に設定し，妬み対処方略の選択に至る因果関係をパス解析によって検討した。その結果，特性・状況要因ともに，妬み感情の喚起とその対処方略の選択に影響を及ぼしており，因果関係については領域・学年によって異なることが示された。一貫した傾向としては，加齢に伴い領域重要度の影響力が増加すること，小学５・６年の段階で，既に獲得可能性の高低に応じた対処方略選択が可能であることが示唆された。

第３部の総括は第９章と第10章から構成されている。第９章では，本論文で得られた知見をまとめた。また，妬み感情のみに特化した検討であったことや，仮想場面を用いた方法論上の限界など，本論文の問題点も指摘した。

第10章では，今後の課題と展望を述べた。第１節においては，実際に妬み感情が効果的に低減される方略の解明と，建設的解決のようなポジティブな方略選択をもたらす動機づけ過程の検証を今後の課題として設定した。第２節では，いじめのような問題行動との妬み感情との関係を明らかにすることの重要性を指摘し，第３節におい

ては，怒りのマネージメントプログラムを参考にして，妬み感情のコントロール法を確立することの必要性を論じた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

従来成人のみに検討されてきた妬みについて児童・生徒を対象に検討したことが，本論文の第一の意義である。児童・生徒の妬み感情の実証的分析の結果，他者に向かうネガティブな感情群と，自己に向かうネガティブな感情群，そして，その両方向性を有した感情の３つの側面があること，また妬み感情の喚起領域に能力，処遇，特性関連があることを見出したことも，貴重な知見である。さらに，妬み態度尺度（他者疾視，自己蔑視），妬み方略尺度（破壊的関与，意図的回避，建設的解決），妬み傾向尺度（妬みの抱きやすさ）等の尺度を作成し，妬みの起きやすい状況要因（獲得可能性や領域重要性）や妬みが起きたときの対処の仕方などを明らかにしたことは，高く評価される。しかし，本論文にて用いられている主な方法は，妬みを引き起こすような場面（仮想場面）を提示して，そこでの反応を測定したものであり，研究結果の生態学的妥当をえるためにも，今後多様な方法にて研究することが課題として残る。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。